

日本語とモンゴル語の受身文の対照比較研究

ブヤン・アリオナ

(広島大学大学院国際協力研究科)

0. はじめに

日本語とモンゴル語の両言語（以下、日モ両言語）は構文構造の上で似ているところが多い。受身文やそれとヴォイスの上で対応関係にある能動文に関しても下記のように似た構文構造をもつ。

能動：NP1「主格」NP2「対格」V
 （日本語とモンゴル語同様）
 受動：NP2「主格」NP1「与位格」
 V-「～（ら）れる」（日本語）
 NP2「主格」NP1「与位格」
 V-「GD¹⁾/UUL²⁾」（モンゴル語）

上で、日本語とモンゴル語の受身文は構文構造は似ていると述べたが、異なる言葉であるため、相違点も見られる。一番大きな相違点は、モンゴル語の受身文は受身の接辞とされる「-GD-」の他に、使役の接辞である「-UUL-」によって表示されるというところにある。つまり、日本語の受身文は助詞「～（ら）れる」のみで表示され得るのに対し、モンゴル語の受身文は接辞「-GD-」と接辞「-UUL-」が役割を分担する。

日本語とモンゴル語の受身文の対照比較研究であるアリオナ.B. (2004) を概観すると、日本語の受身文は助詞「～（ら）れる」だけで表示されるにも関わらず、受身と使役という2つの接辞によって表示されるモンゴル語の受身文よりは範囲が広く、種類が多い。

本稿の目的は、アリオナ.B. (2004) を参考にしつつ、日本語とモンゴル語の受身文を、両言語に共に存在する受身文、あるいは片方にしか存在しない受身文という形で整理し、日モ両言語の受身

文の範囲を明らかにすることにある。また、日モ両言語で共に存在するタイプであっても、モンゴル語では受身を避けるケースがあるように思われる。この問題を考察し、それがどのような性質のものであるのかを明らかなものにする。そして、モンゴル語の「-UUL-」受身文と「-GD-」受身文の役割分担をアリオナ.B. (2004) よりもさらに明らかなものにする。

本稿の主な作業は、日モ両言語の受身文を分類整理することであるが、日モ両言語の受身文を、それらの分類原理を理解し、整理していくと、両言語の受身文の本質、受動化の機能が見えてくることが予測される。

先行研究について簡単に述べると、日本語の受身文の研究はモンゴル語より進んでおり、細分化する傾向にある。日本語の受身文は、三上 (1972)、柴谷 (1978) を初めとする日本語学者等によって、かなり研究され、統語的な面から直接受身と間接受身に、意味的な面から「被害受身」と「中立受身」に分けられている。モンゴル語の受身文は、Sanžeev.G.D. (1964)、Byambasan.P. (1970) 等を初めとするロシアやモンゴルの学者等によって形態論、または統語論的な面から研究されたが、意味論的な面から研究し、受身文の分類を行った研究と言え、アリオナ.B. (2004) を除けば、見当たらない。

日モ両言語の受身文を整理するためには、両言語の受身文の分類が重要であるが、直接受身と間接受身、「中立受身」と「被害の受身」という分類だけでは物足りないところがある。したがって、本稿では、上記の基本的な分類の他に、日本語の受身文を、受動化の機能的な面から分類した益岡

(1987) と、モンゴル語の受身文を分類したアリオナ・B. (2004) を利用する。

本稿の構成は次の通りである。

第1節では、日本語の受身文に関する先行研究を概観し、日本語の受身文の種類、及びその性質についてまとめる。第2節では、アリオナ・B. (2004) が行ったモンゴル語の受身文の分類を紹介しながら、それが日本語に存在するものであるかどうかを考える。また、日モ両言語で共に存在するタイプであっても、モンゴル語では受身を避けるケースがあるように思われる。この問題を考察し、それがどういう性質のものであるのかを明らかにする。そして、モンゴル語の「-UUL-」受身文と「-GD-」受身文の役割分担をアリオナ・B. (2004) よりもさらに明らかなものにする。第3節では、日本語に存在するが、モンゴル語に存在しない受身文について考察する。第4節では、本稿のまとめを書く。

1. 先行研究における日本語の受身文の分類

本節では、日本語の受身文の種類や、その性質について述べる。

日本語の受身文は、統語的な面から直接受身と間接受身に分けられる。そして、その性質（現われる動詞、格、主体、意味機能）によって、「他動詞受身」、「自動詞の受身」、「利害受身」、「被害の受身」（「迷惑の受身」）、「中立受身」、「に受動文」、「によって受動文」、「有情の受身」、「無情の受身」などと下位分類される。また、間接受身に属するが、直接受身と間接受身の中間的な性質をもつ「持ち主の受身」というものもある。このような、日本語の受身文の、意味的、統語的な面からの分類について1.1節で述べる。

日本語の受身文を、受動の機能的な面から分類した益岡 (1987) については、1.2節で述べる。益岡 (1987) の分類には、属性叙述受動文、受影受動文、降格受動文がある。

1.1. 日本語の受身文の意味的、統語的な面からの分類

1.1.1. 直接受身について

直接受身とは、能動文の目的語を主体に変えて

作る受身のことである。したがって、他動詞からしか作られない、「他動詞受身」である。

直接受身には、主体が出来事から利害を受けたことを意味するもの（「利害受身」）（例は、(1)を参照）もあれば、中立的なもの（「中立受身」neutral passive）（例は、(2)を参照）もある。つまり、直接受身の意味は現われる動詞の語彙的意味に左右される。直接の受身には、主体が利害を受けたことを意味する形式も中立的な視点から出来事を捉える形式もあるため、主体にくるものは有情物であっても無情物であってもかまわない。

- (1) 私は先生に叱られた。
- (2) 鉄道が敷かれた。

「利害の受身」は、黒田 (1979) によって、「に受動文」（“*ni passive*”）と名付けられ、「受影的」（“*affective*”）意味を伴うことが、「中立受身」は、「によって受動文」（“*ni yotte passive*”）と名付けられ、受影の意味は表さないことが指摘されている。

以上では、日本語の直接受身について簡単に述べた。以下では、間接受身について述べる。

1.1.2. 間接受身について

間接受身とは、能動文になかった名詞句が新たな名詞句として追加され作られる受身のことである。

間接受身文は、新しく加えられた主体にとって、その出来事が好ましくない出来事であることを意味する被害受身 *adversative passive* である。したがって、有情の受身でもある。例は、(3)を参照。

- (3) 私は隣の人に一晚中騒がれて眠れなかった。

また、間接受身は他動詞からだけではなく、自動詞からも作られるため、自動詞受身とも呼ばれる。例は、(4)を参照。

- (4) 雨に降られた。

以上では、日本語の間接受身について簡単に述べた。以下では、直接受身と間接受身の中間的な

性質をもつ「持ち主の受身」について述べる。

1.1.3. 持ち主の受身 (possessor passive) について

「持ち主の受身」とは、能動文になかった主体が身体部位や所有物において動作を受けることを意味する受身文のことである。「持ち主の受身」には、身体部位や所有物を通して主体に及ぶ出来事が主体にとって、被害を意味するか否かは、出来事の内容が迷惑か否かによって決まる形式、つまり直接受身同様の形式（例は、(5)と(6)を参照）があるのに対し、主体が所有物において出来事から「被害」を受けることを意味する形式、つまり間接受身同様の形式（例は、(7)を参照）がある。

- (5) 田中さんは先生に頭を撫でられた。
- (6) 自分の作った作品を皆に褒められて嬉しかった。
- (7) 泥棒にお財布を取られた。

本節では、日本語の受身文における、意味的、統語的な面からの分類を紹介した。次節では、受動化の機能的な面からの分類を紹介する。

1.2. 受動の機能的な面からの分類

日本語の受身文を、受動化の機能的な面から分類したものといえば、益岡(1987)がある。

益岡(1987)は、日本語の受身文を「受影受動文」、「属性叙述受動文」、「降格受動文」の3つに分けた。以下に、それぞれを紹介する。

1.2.1. 属性叙述受動文について

属性叙述受動文は、ある対象について、その属性を述べる文であり、特定の時空間における事象の生起・存在を描写しない特性をもつ。例は、(8)～(11)に書く。

- (8) 花子の家は高層ビルに囲まれている。
- (9) XはYに含まれる。
- (10) この商品は多くの人に親しまれている。

(11) 鈴木さんは陶芸家として知られている。

1.2.2. 受影受動文について

次に、受影受動文は、ある出来事から主体が何らかの影響を受けるという事態を表わす受身文のことである。出来事から主体に及ぶものは、直接的なものもあれば、間接的なものもある。例は、(12)～(15)に挙げる。

- (12) 私はそのことで親に叱られた。(直接受身)
- (13) 太郎は電車の中で隣りの人に足を踏まれた。(持ち主の受身)
- (14) 花子は子どもに泣かれて、良く寝られなかった。(自動詞の受身)
- (15) 鈴木さんは部下に突然辞められた。(他動詞の間接受身)

1.2.3. 降格受動文について

降格受動文は、動作主の背景化が受動化の動機となる文のことをいう。例は、(16)～(18)に書く。

- (16) 答案用紙が回収された。
- (17) 会場の近くに臨時の休憩所が作られた。
- (18) 代表団が現地に派遣された。

降格受動文は、動作主が背景化される文のことであるが、動作主が完全に現われないというわけではない。動作主が、「によって」を取って、現われることが可能である。つまり、降格受動文は、黒田(1979)が指摘した「によって受動文」(“*ni yotte passive*”)に相当する。

本節では、日本語の受身文に関する先行研究を概観し、日本語の受身文の種類や、その性質について考えた。日本語の受身文は、統語的な面からは「直接受身」と「間接受身」に、意味的な面からは「中立受身」と「被害受身」に、受動化の機能的な面からは「受影受動文」、「属性叙述受動文」、「降格受動文」に分けられることをまとめた。次節では、アリオナ.B.(2004)が行ったモンゴル語の受身文の分類を紹介しながら、本節で扱った日本語の受身文と対照し、日本語にも存在するものであるのかどうかを考える。

2. モンゴル語の受身文の分類、及び日モ両言語の受身文の対照

アリオナ.B. (2004) は、モンゴル語に直接受身と間接受身が存在することを指摘し、直接受身文をさらに、「直接対象の受身文」、「状態意の受身文」、「ヨーロッパ風の受身文」、「偶発/自発意の受身文」に分けた。モンゴル語の間接受身には、日本語の「持ち主の受身文」に相当するものがある。

アリオナ.B. (2004) が指摘した「直接対象の受身文」は益岡 (1987) がいう直接的「受影受動文」に、「状態意の受身文」は「属性叙述受動文」に、「ヨーロッパ風の受身文」は「降格受動文」にそれぞれ当てはまる。「偶発/自発意の受身文」は、アリオナ.B. (2004) によって、日本語に存在しない受身文として指摘されている。

2.1 節では、直接受身について、2.2 節では、間接受身について述べる。

2.1. 直接受身

2.1.1. 直接対象の受身文

「直接対象の受身文」とは、能動文の目的語を主格に変えて作る受身文のことである。受身文に動作主が現れていなくても、動作主が現実的に存在し、受身文に加えることが可能である。

「直接対象の受身文」は日本語にも存在する。益岡 (1987) の分類では、直接的「受影受動文」に当てはまる。

被動者は有情物に限られ、特定の時空間における事象において、被動者が「利害」を受けることを意味する。つまり、この種の受身文の意味は、動詞の語彙的意味に左右される。例として、(19)～(21)を挙げる。(19)と(20)は「被害」を、(21)は「利益」を意味する。日本語の例は、モンゴル語の例文の訳文を参照。

- (19) Bat bagš-i-d
バット: [主格] 先生-i-与位格
zempl-üül-sen.
叱る-UUL- [過去]
「バットは先生に叱られた」

- (20) Tatatunga Mongol-iyn
タタトンガ: [主格] モンゴル- [属格]
tsereg-t barivčl-a-gd-žee.
逮捕する-a-GD- [完了過去] 軍- [与位格]
「タタトンガはモンゴル軍に逮捕された」
(橋本2003: 18)

- (21) Bat bagš-i-d
バット: [主格] 先生-i-与位格
sajšaa-gd-san.
誉める-GD- [過去]
「バットは先生に誉められた」

接辞「-UUL-」と接辞「-GD-」によって表示されるモンゴル語の「直接対象の受身文」は「被害」を意味する場合、自発/偶発的な意味合いを、あるいは圧倒的/直接的な意味合いを伴わなければならない。例えば、同一の動詞が現われる(22)と(23)は、日本語ではどちらも適切な文であるのに対し、モンゴル語では、(22)は、接辞「-UUL-」によるものも、接辞「-GD-」によるものも認められない。一方、(23)は、接辞「-GD-」によるものは認められる。接辞「-UUL-」によるものは(a)に、接辞「-GD-」によるものは(b)に書く。日本語の例(モンゴル語の訳文)は、(c)に書く。

- (22) a. ×Bi ted-e-n-d
私: [主格] 彼等-e-n- [与位格]
sonžingui nüd-eer
じろじろの 目- [造格]
xar-uul-san.
見る-UUL- [過去]
- b. ×Bi ted-e-n-d
私: [主格] 彼等-e-n- [与位格]
sonžingui nüd-eer
じろじろの 目- [造格]
xar-a-gd-san.
見る-a-GD- [過去]

c. 私は彼等にじろじろの目で見られた.

(23) a. ×Bi bagš-i-d
私: [主格] 先生-i- [与位格]
xar-uul-san. 【他動詞文】
見る-UUL- [過去]

b. Bi bagš-i-d
私: [主格] 先生-i- [与位格]
xar-a-gd-san.
見る-a-GD- [過去]

c. わたしは先生に見られた.

(22)～(23) に挙げたモンゴル語の「直接対象の受身文」の中で、(23 b) だけが適格となる理由は、それが「先生に見られてしまった」という自発/偶発的な意味合いを伴うからである。

この指摘を詳しく説明するために、接辞「-GD-」の語彙的意味に注目したい。

接辞「-GD-」は、アリオナ.B. (2004) によって、「受動の他に、自発、自動、可能を表示し」、「偶発/自発/自動の意味合いが強い」と指摘されている。xara-gd- (見える), sonso-gd- (聞こえる) などの自発, yava-gd- (行う), yala-gd- (負ける) などの自動詞を表示し, övčind nerve-gd- (病気にかかる), üert av-t- (洪水に浸る), salxind tuu-gd- (風に飛ばされる) などから分かるように、動作主から被動者に及ぶ影響は自発/偶発的、または圧倒的/直接的である。

(23 b) のモンゴル語の「直接対象の受身文」は適格となる理由は、この文は圧倒的/直接的な意味合いはないが、自発/偶発的な意味合いはあるためである。一方、(22 a) と (22 b) には、自発/偶発的な意味合い ((22 a) は接辞「-UUL-」によるものであるため、自発/偶発的な意味合いはもともとなし) と圧倒的/直接的な意味合いのどちらもないため、不適格な文となる。

また、(24) と (25) も、上の指摘を証明する良い例として挙げられる。同じ語幹をもつ「duud-uul-」と「duud-a-gd-」を見てみると、「duud-uul-」は受身文で現れる場合、「大声で悪口を言われる」

という意味で使われるが、その意味合いは、(22 a) に比べると、圧倒的/直接的であるため適格な文となる。

「duud-a-gd-」(呼ばれる) は、その語彙的意味を保つ。つまり、中立的な意味を表す。

(24) Bat Tuyaa-d
バット: [主格] トヤ- [与位格]
teneg-eer-ee duud-uul-san.
馬鹿- [造格] - [再帰] 呼ぶ-UUL- [過去]
「バットはトヤに「馬鹿」と言われた」

(25) Bat bagš-i-d
バット: [主格] 先生-i- [与位格]
duud-a-gd-san.
呼ぶ-a-GD- [過去]
「バットは先生に呼ばれた」

上で、モンゴル語の「直接対象の受身」について考察し、日本語に存在する同じタイプのものと対照した。両言語の「直接対象の受身」は、被動者が「有情物」に限られる。そして、その意味機能は、被動者が特定の時空間における事象において「利害」を受けることである。さらに、モンゴル語の「直接対象の受身文」は日本語のそれと違って範囲が狭く、自発/偶発的な意味合い、または圧倒的/直接的な意味合いをもっていないと適格とならないことが分かった。

2.1.2. ヨーロッパ風の受身文

ここでは、アリオナ.B. (2004) が指摘した「ヨーロッパ風の受身文」について紹介し、日本語に存在するかどうかを考える。

「ヨーロッパ風の受身文」は、動作主が完全に背景化される、つまりもっぱら被動者の立場を述べる文のことである (アリオナ.B. (2004))。動作主が能動文に現れても、受身文には現れにくいという点で「直接対象の受身文」と異なる。接辞「-UUL-」は現れず、接辞「-GD-」だけが現われるこの種の受身文は被動者が有情物であっても無情物であってもかまわない。文の意味機能は、現われる動詞の語彙的な意味により「利害」を意味する

ものもあれば、中立的なものもある。例は、(26)～(27)に書く。

この種の受身文は、日本語にも存在し、益岡(1987)が指摘した「降格受動文」に相当する。例は、モンゴル語の例の訳文を参照。

- (26) Mongol-ijn nuuts tovčoo
 モンゴル- [属格] 秘密 要約
 800-aad žil-ijn ömnö
 800-およそ 年- [属格] 前
 zoxio-gd-son.
 著作する-GD- [過去]
 『元朝秘史』はおよそ800年前に書かれた」
- (27) Togoo öndör alban tušaal-d
 トゴ- [主格] 高い 公務- [与位格]
 tomil-o-gd-o-v.
 任命する-o-GD-o- [過去]
 「トゴ-は上司に任命された」

日モ両言語で共に存在する「ヨーロッパ風の受身文」であるが、相違点も見られる。それは、日本語の「ヨーロッパ風の受身文」(「降格受身文」)は(28b)のように、動作主が文中で現われることが可能であるが、モンゴル語では動作主が現われにくい(例は、(28a)を参照)といったところにある。

- (28) a. ×Ene nom
 この 本: [主格]
 zaluu-čüud-a-d ix
 若者-複数-a- [与位格] 多い
 unši-gd-a-ž baj-gaa.
 読む-GD-a- [連用・結合] いる- [継続]
 「この本は若者によく読まれている」

b. この本は若者によく読まれている。

さらに、このタイプは日モ両言語で共によく見られるタイプである。「ヨーロッパ風の受身」では両言語の受身を表示する接辞は生産性が高まる。つまり、現代的な表現が新しく作り出される。例

えば、最近、インターネットの普及に伴い、かつてのモンゴル語ではまったく見られなかった(29)のような表現が認められるようになった。

- (29) Ene medee 500 udaa
 この ニュース: [主格] 500回
 unši-gd-san.
 読む-GD- [過去]
 「このニュースは500回読まれた」

この種の受身文は、益岡(1991)によって指摘されているように、事象の生起を中立的な立場から客観的に表現するという点で事象の生起を表現する自動詞文と同じ性格のものである。

本節で、日モ両言語で共に存在する「ヨーロッパ風の受身文」(「降格受身文」)について述べた。日モ両言語の「ヨーロッパ風の受身文」は「利害」を意味するものと、中立的なものがある、また、現代的な表現によく見られることを指摘した。

2.1.3. 状態意の受身文

ここでは、アリオナ.B.(2004)が指摘した「状態意の受身文」を紹介し、日本語に存在するかどうかを考える。

「状態意の受身文」とは、動詞が行為動詞の受動形であっても、具体的な行為を表さない、主語について属性などを述べる文のことである(アリオナ.B.(2004))。この種の受身文では、接辞「-UUL-」は現れず、接辞「-GD-」だけが現われる。

この種の受身文は日本語にも存在する。益岡(1987)が指摘した「属性叙述受動文」に相当する。例は、(30)～(31)を参照。

- (30) Xanako-g-ijn ger
 花子-g- [属格] 家: [主格]
 öndör bajšin-g-uud-aar
 高い 建物-g- [複数] - [造格]
 xüreel-e-gd-sen.
 囲む-e-GD- [過去]
 「花子の家は高層ビルに囲まれている」

- (31) X bol Y-d
 X [話題表示] Y- [与位格]
 aguul-a-gd-dag.
 含む-a-GD- [習慣]
 「XはYに含まれる」

アリオナ.B. (2004) は、この種の受身文は動作主が自らの意思で行為を行うことのできない無情物でなければならないと指摘しているが、(32) が許されることから分かるように、動作主が有情物であってもかまわない。

- (32) Bagš oyutn-uud-a-d
 先生: [主格] 学生- [複数] -a- [与位格]
 xundle-gd-deg.
 尊敬する-GD- [習慣]
 「先生は学生等に尊敬されている」

さらに、このタイプの受身文はその言語特有の表現が多い (アリオナ.B. (2004)). つまり、直訳できないものが多い。日本語に直訳できないモンゴル語の例は (33)~(34) に、モンゴル語に直訳できない日本語の文は (35) に書く。

- (33) Ene tsamts бүр
 この セーター: [主格] 非常に
 xir-e-n-d-ee
 汚れ-e-n- [与位格] - [再帰]
 bari-gd-čix-a-ž.
 捕える-GD- [完結] -a- [過去]
 「このセーターは非常に汚れている」

- (34) Emee argagüi
 祖母: [主格] 仕方なく
 nas-a-n-d dara-gd-žee.
 年齢-a-n- [与位格] 圧する-GD- [過去]
 「祖母はもう年に勝てなくなる」

- (35) みんなは眠気に襲われた。
 Bügd бүр nojr n'
 皆: [主格] 非常に 眠気 [3人称所有]

xür-sen.
 至る- [過去]

このタイプの受身文は、その言語特有のものが多く、つまり新しい表現ができにくいという点で、「ヨーロッパ風の受身」と異なる。

言語特有の表現は、自然現象を表すものが多く、そして主体はその自然現象に反抗する自力が足りないまま、自然にそういう状態に陥ってしまったという意味合いがある。こういう意味合いをもつため、この種の受身文は、受身というより自発に近い。

2.1.4. 偶発/自発意の受身文

アリオナ.B. (2004) が指摘した「偶発/自発意の受身文」とは、偶発的に起こった行為により主体が影響を受けることを意味する文のことである。例は、(36) に書く。

- (36) Namajg будаа-taj
 [1人称対格形] 米- [名詞派生接辞]
 xuurga id-e-ž
 炒め物 食べる-e- [連用・結合]
 baj-tal čuluu
 いる- [限界] 石: [主格]
 zažl-a-gd-a-v.
 噛む-a-GD-a- [過去]
 「私は焼き飯を食べていたら (焼き飯の中に混じっていた) 石を噛んでしまった」
 (斉藤2000)

この種の文は、モンゴル語では決まった表現としていくつかのものが存在するが、日本語には存在しない。

この種の受身文は、偶発/自発的に起こる事象の生起を中立的な立場から客観的に表現するという点で、事象の生起を表現する自動詞文と同じ性格のものである。

2.2. 間接受身文

アリオナ.B. (2004) は、モンゴル語に存在する間接受身というものには、日本語の「持ち主の受

身文」と同様の構文構造をもつ文があることを指摘している。この種の受身文では、接辞「-GD-」は現れず、接辞「-UUL-」だけが現れる。2. 1節で、接辞「-UUL-」による「直接対象の受身文」は「利害」を意味すると述べたが、同じようなことが、この種の受身文にも言える。例は、(37)～(40)を参照。

- (37) Aav xulgajč-i-d xamag
 父: [主格] 泥棒-i- [与位格] すべての
 möng-öö sujil-uul-san.
 お金- [対格・再帰] する-UUL- [過去]
 「父は泥棒にすべてのお金をすられた」
- (38) Bi noxoj-d
 私: [主格] 犬- [与位格]
 gar-aa xaz-uul-san.
 手- [対格・再帰] 噛む-UUL- [過去]
 「私は犬に手をかまれました」
- (39) a. 田中さんは先生に頭を撫でられた。
 b. Tanakasan bagš-i-d
 田中さん: [主格] 先生-i- [与位格]
 tolgoj-g-oo il-üül-sen.
 頭-g- [再帰] 撫でる-UUL- [過去]
- (40) a. 山田さんは論文を高く評価された。
 b. Yamadasan sudalгаа-n-iy
 山田さん: [主格] 研究-n- [属格]
 ajil-aa öndr-öör
 仕事- [再帰] 高い- [造格]
 ünél-üül-sen.
 評価する-UUL- [過去]

本節では、アリオナ.B. (2004) が行ったモンゴル語の受身文の分類を紹介しながら、それが日本語に存在するものであるのかどうかを考察した。

3. 日本語に存在するがモンゴル語に存在しない受身文

本節では、日本語に存在するがモンゴル語に存在しない受身文について考察する。モンゴル語に

存在しない日本語の受身文には、直接受身の「与格受身文」と間接受身の「無関与の受身文」(自動詞によるものと他動詞によるものがある)がある。3.1節では、直接受身について、3.2節では、間接受身について述べる。

3.1. 直接受身

3.1.1. 「与格受身文」

日本語では、能動文の与格目的語に受動化を適応し、受身文を作ることができるが、鷺尾 (1997)、またアリオナ.B. (2004) によると、この種の受身文はモンゴル語には存在しない。例を、(41)～(43)に書く。モンゴル語の例は、日本語の例の訳文を参照。接辞「-UUL-」による文(43)は受身文ではなく、使役文として解釈される。接辞「-GD-」による受身文(42)は不適格な文である。

- (41) 太郎が花子に本を与えられた。
- (42) ×Taroo Xanako-d
 太郎: [主格] 花子- [与位格]
 nom ög-ö-gd-sön.
 本: [対格] あげる-ö-GD- [過去]
 「太郎が花子に本を与えられた」
- (43) Taroo Xanako-d nom
 太郎: [主格] 花子- [与位格] 本: [対格]
 ög-üül-sen.
 あげる-UUL- [過去] 【使役】
 「太郎が(誰かに頼んで)花子に本を与えさせた。」

本節では、日本語に存在するがモンゴル語に存在しない直接受身の「与格受身文」について述べた。次節では、日本語に存在するがモンゴル語に存在しない間接受身文について述べる。

3.2. 間接受身

日本語の間接受身文には、自分自身にまったく向かない出来事から被動者が間接的に「被害」を受けられることを意味する形式がある。アリオナ.B. (2004) は、このようなタイプを「無関与の受身」と名付けている。この「無関与の受身文」には、

自動詞が現われる形式と他動詞が現われる形式があるが、モンゴル語にはどちらも存在しない。

3.2.1. 「無関与の受身文」

日本語の「無関与の受身文」には、他動詞が現われるものと自動詞が現われるものがあるが、モンゴル語には、どちらも存在しない。「無関与の受身文」は「被害の受身」である。「無関与の受身文」と「被害」を意味する「直接対象の受身文」の異なるところは、出来事から被動者に及ぶ影響力にある。「直接対象の受身文」のほうが、直接的で強いのに対し、「無関与の受身文」は、間接的で弱い。つまり、モンゴル語の「被害」の受身には、出来事から被動者に及ぶ影響力が直接的で強いものしかないということである。日本語の他動詞の「無関与の受身文」(44)を、モンゴル語に直訳すると(45)、(46)のように不適格となる。(45)は接尾辞「-GD-」による文であり、(46)は接尾辞「-UUL-」による文であるが、両方とも不適格である。

(44) 隣りの人にたばこを吸われて、いやでした。

(45) ×Xažuu-d-aa suu-ž
 となり-[与位格]-[再帰] 座る-[連用・結合]
 baj-san xün-d
 いる- [過去] 人- [与位格]
 tamxi tat-a-gd-aad taagüj
 タバコ 吸う-a-GD- [連用・分離] いや
 baj-san.
 ある- [過去]

(46) ×Xažuu-d-aa suu-ž
 となり-[与位格]-[再帰] 座る-[連用・結合]
 baj-san xün-d tamxi
 いる- [過去] 人- [与位格] タバコ
 tat-uul-aad taagüj
 吸う-UUL- [連用・分離] いや
 baj-san.
 ある- [過去]

次に、日本語の自動詞の「無関与の受身」である(47)と(50)をモンゴル語に直訳すると、それぞれ(48)と(49)、(51)と(52)のように不適格となる。接辞「-GD-」による文も、接辞「-UUL-」による文も不適格である。

(47) 夜、子どもに泣かれて、寝られなかったんですよ。

(48) ×Urd šönö xüüxd-e-d
 前 夜 子ども-e- [与位格]
 ujl-a-gd-aad
 泣く-a-GD- [連用・分離]
 unt-a-ž čad-aa-güj.
 寝る-a- [連用・結合] できる-[継続]-[否定]

(49) ×Urd šönö xüüxd-e-d
 前 夜 子ども-e- [与位格]
 ujl-uul-aad
 泣く-UUL- [連用・分離]
 unt-a-ž čad-aa-güj.
 寝る-a- [連用・結合] できる-[継続]-[否定]

(50) ゆうべ帰る時、雨に降られました。

(51) ×Öcigdör oroj xar'-x
 昨日 夜 帰る- [不定形]
 zam-d-aa
 道- [与位格] - [再帰]
 boroo-n-d or-o-gd-son.
 雨-n- [与位格] 降る-o-GD- [過去]

(52) ×Öcigdör oroj xar'-x
 昨日 夜 帰る- [不定形]
 zam-d-aa boroo-n-d
 道- [与位格] - [再帰] 雨-n- [与位格]
 or-uul-san.
 降る-UUL- [過去]

鷺尾(1997)も、モンゴル語には「自動詞の受身」は存在しないと指摘して、日本語では「自動

詞の受身」で表される意味がモンゴル語で「他動詞の受身」で表されることがあると述べ、(53)を例として挙げている。「自動詞の受身」の(51)と(52)は不適格な文であるが、「他動詞」を使った受身文(53)は許される。つまり、「or-」(降る)という自動詞は受動化が不可能であるが、「tsoxi-」(打つ)という他動詞を比喩的に使った受身文なら許される。「比喩的に」と書いた理由は、「boroo tsoxi-」(雨が打つ)という表現は許されないからである。つまり、対応する能動文はもたない、事象の生起を中立的な立場から客観的に表現する文である。また、(53)がモンゴル語で許される理由は、この文が、「被害」の「直接対象の文」と同様に、出来事から被動者に及ぶ影響は直接的で強いであろう。

(53) Öcigdör oroj xar'x
 昨日 夜 帰る- [不定形]
 zam-d-aa boroo-n-d
 道- [与位格] - [再帰] 雨-n- [与位格]
 tsoxi-uul-san.
 打つ-UUL- [過去]
 「ゆうべ帰る時、雨に降られました」

(53) のような表現が接辞「-GD-」を用いて、モンゴル語ハルハ方言に見られる場合は、(54) のような派生動詞に限られる。

(54) Ene davs üjldver-t
 この 塩: [主格] 工場- [与位格]
 iod-ž-i-gd-son.
 ヨード- [動詞派生接辞] -i-GD- [過去]
 「この塩は工場でヨード化した」
 (梅谷2005:7)

(54) の「iod-ž-i-gd-o-」は、梅谷(2005)が指摘しているように、「自然にヨード化する」という意味の「iodži-」と違って、受身的意味がある。

事象の生起を中立的な立場から客観的に表現する「ヨーロッパ風の受身文」と似た性質をもつ(53)、(54) のような表現は、ボルジギン・ウルジ

(2006)によると、モンゴル語諸方言にも見られる。例は、(55)を参照。しかし、この文はモンゴル語ハルハ方言では許されない。

(55) a. Bi boroo-n-d
 私: [主格] 雨-n- [与位格]
 nor-o-v.
 濡れる-o- [過去]
 「私は雨に濡れた」
 b. Bi boroo-n-d
 私: [主格] 雨-n- [与位格]
 nor-o-gd-o-v.
 濡れる-o-GD-o- [過去]
 「私は雨に濡れた」

以上では、日本語に存在するが、モンゴル語に存在しない「無関与の受身文」について述べた。また、モンゴル語に存在しないタイプであるが、許されるケースが見られることを明らかなものにした。その許されるケースは、自動詞を避け、その代わりに他動詞を使う、意味機能は、出来事から被動者に及ぶ影響が直接的で強いものに限る。また、派生自動詞が接辞「-GD-」をとり、受身を意味する表現も、モンゴル語に見られることを言及した。この場合、文の意味機能は、「ヨーロッパ風の受身文」と同様に、事象の生起を中立的な立場から客観的に表現する。

4. まとめ

本稿では、アリオナ.B. (2004) を参考にしつつ、日本語とモンゴル語の受身文を、両言語に共に存在する受身文、あるいは片方にしか存在しない受身文という形で整理し、日モ両言語の受身文の範囲を明らかにした。また、日モ両言語で共に存在するタイプであっても、モンゴル語では受身を避けるケースには、どのようなものがあるのかを考察した。モンゴル語の「-UUL-」受身文と「-GD-」受身文の役割分担がアリオナ.B. (2004) よりさらに明らかなものになった。

まとめを、モンゴル語の受身文から書くことにする。

モンゴル語には、直接受身として「直接対象の

受身」, 「ヨーロッパ風の受身」, 「状態意の受身」, 「偶発/自発意の受身」, 間接受身として「持ち主の受身」がある。接辞「-GD-」は, 直接受身のみに現れる。そして, 接辞「-GD-」が現れる受身文は, 「直接対象の受身」→「ヨーロッパ風の受身」→「状態意の受身」→「偶発/自発意の受身」という順で, 自動詞文の性質が高まり, 意味的には, 中立的なものが多くなる。一方, 接辞「-UUL-」は, 間接受身である「持ち主の受身」を単独で表示すると共に, 直接受身では, 「直接対象の受身」にしか現れない。そして, それは「被害」を意味する受身文に現れることが多い。

接辞「-GD-」による受身文は自動詞/自発文に似た性質をもつ, つまり動作主が背景化される形式で活躍するのに対し, 接辞「-UUL-」による受身文は動作主が存在しなければならない。

日モ両言語で共に存在する受身文には, 直接受身として「直接対象の受身」, 「ヨーロッパ風の受身」, 「状態意の受身」と間接受身として「持ち主の受身文」がある。そして, 「直接対象の受身文」に属するものであっても, 出来事から被動者に及ぶ影響が弱いものは, モンゴル語には存在しないことが分かった。

日本語に存在しないモンゴル語の受身文として, 「偶発/自発意の受身文」がある。

さらに, モンゴル語に存在しない日本語の受身文として, 直接受身の「与格受身文」と間接受身の「無関与の受身」とがあることが分かった。また, 日本語の, 自動詞による「無関与の受身」は, モンゴル語で許されるケースがあることが明らかになった。出来事から被動者に及ぶ影響が直接的で強い場合, 自動詞は避けられ, 受身文が使われる。また, 自動詞が接辞「-GD-」をとり, 受身を意味する表現も, モンゴル語に見られることが明らかになった。この場合, 文の意味機能は, 「ヨーロッパ風の受身文」と同様に, 事象の生起を中立的な立場から客観的に表現する。

【注】

1) 語幹末音に従い, 「-gd-」, 「-d-」, 「-t-」の3つの形があるが, 受身の他に, 自発, 自動詞, 可能

を表示する。受身を表示する屈折接辞の役割を果たすが, 「-GD-」だけである。

2) 「-UUL-」の他に, 母音調和による「-UUL-」という形と動詞語幹末音による「-LGA-」という形がある。もともとは, 文の項を一つ増やす機能を持つ接辞であるが, 他動詞に付くと「他動」(使役)の他に, 「受身」を表示する。

モンゴル語のローマ字表記の方針は下記の通りである。

a → a, б → b, в → v, г → g, д → d, е → ye,
 ө → yo/yö, ж → ž, з → z, и → i, й → j, к → k,
 л → l, м → m, н → n, о → o, Ө → ö, п → p,
 р → r, с → s, т → t, у → u, Ү → ü, ф → f, х → x,
 ц → ts, ч → č, ш → š, шц → šč, ь → " , ы → ij,
 ь → ', э → e, ю → yu/yü, я → ya

参考文献

- アリオナ.B. (2004) 『日本語とモンゴル語の受身文に関する対照比較研究』 広島大学大学院国際協力研究科教育文化専攻, 修士論文 (未公刊)
- 庵 功雄・高梨信乃・中西及美子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク, pp. 102-187
- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』 スリーエーネットワーク
- 梅谷博之 (2005) 「モンゴル語の自動詞の受身」 麗澤大学言語学研究センター第20回研究セミナー, 2005年11月17日, オンライン・ハンドアウト.
 (http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/LINC/pub/LinC_20051117_umetani.pdf)
- 呉人徳司 (2006) 「モンゴル語諸方言における受身と使役について」 庄垣内正弘先生退任記念論集『ユーラシア諸言語の研究』, pp. 81-91
- Kuroda, S.Y. (1979) On Japanese Passive, in *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Kenkyusha

- 黒田成幸 (1985) 「受身についての久野説を解釈する——一つの反批判——」『日本語学』第4巻10号, pp. 69-76
- 齊藤光介 (2000) 「モンゴル語の受身について」東京外国語大学大学院博士前期課程アジア第一専攻 Luncheon Linguistics 発表資料 (未公刊)
- Sanžeev.G.D. (1964) *Sravnitel'naya grammatika Mongol'skix yazikov*, Moskva
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 橋本邦彦 (2003) 「モンゴル語の受動文の意味と機能」『日本モンゴル学会紀要』33号, pp. 15-27
- Byambasan.P. (1970) *Orčin tsagijn Mongol xelnij üil ügijn xev baidal*, Xel zoxiol sudlal, ŠUA. Xel zoxioliyn xüreelen, Ulaanbaatar.
- ボルジギン・ウルジ (2006) 「モンゴル語の所謂自動詞受身について」日本モンゴル学会 2006/11/25ハンドアウト
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 「受動表現と主観性」仁田義雄編 『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 三上 章 (1972) 『現代語法序説』くろしお出版
- 鷲尾龍一 (1997) 「比較文法論の試み〜ヴォイスの問題を中心に」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社

A Contrastive Study on Japanese and Mongolian Passive Sentences

Buyan ARIUNAA

Graduate School for International Development and Cooperation

Hiroshima University

1-5-1, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, 739-8529, Japan

E-mail: buyanariun@hotmail.co.jp

Abstract

This work compiles the types of the sentences in passive voice in Japanese and Mongolian languages, referring to Ariunaa, B. (2004).

Following types occur in both Japanese and Mongolian languages: “A passive voiced sentence with direct objects”, “a passive voiced sentence with European language order”, “a passive voiced sentence, which denotes moods”, and “a passive voice sentence of subjects” of indirect passive voiced sentences.

“A sudden/self discovered passive voiced sentence” type exists in Mongolian language, but does not in Japanese language. On the other hand, “A dative passive voiced sentence” of direct passive voice and “An independent passive voiced sentence” of indirect passive voice sentences are found in Japanese and there are not any in Mongolian.